

講演 4

オセアニア考古学の立場から
—世界遺産「タプタプアテア」と篠遠喜彦—



石村智
(東京文化財研究所・無形文化遺産部・部長)

私が頂いたお題は「オセアニア考古学の立場から」ですが、今回は、後藤先生が挙げられた4人の巨人のうちの1人・篠遠喜彦先生のエピソードに焦点を当ててお話をしたいと思います。

お話に入る前に、私と後藤先生との関わりを少しご紹介します。私自身、元々は京都大学の考古学研究室に入り、修士課程に進んだときにオセアニア考古学を自分のフィールドにしました。当時、京都大学霊長類研究所にいらっしゃった片山一道先生がポリネシアで調査をされるということになりました。片山一道先生は形質人類学の先生なので人骨を研究されているのですが、私はそこにくっついていき、オセアニア・ポリネシアの考古学をやるという研究者人生を始めました。それが1999年のことでしたが、外国考古学の中でもオセアニア・ポリネシアというのは非常にマイナーな地域であることは確かですが、先達の日本人の研究者として、篠遠喜彦先生がいて、さらには後藤明先生という方もいるということ、研究を進める上で知りました。

タイミングが良かったことに、2001年に、後藤先生がそれまでいらっしゃった宮城学院大学から同志社女子大学に移られました。私も京都大学にいたので、非常に近いところにいらしたわけです。実際にお会いしたのは多分2002年ぐらいだと思いますが、そこから親しくさせていただき、当時後藤先生が始められた考古学的民族誌研究会に加えていただいたのが始まりだと思います。そのときに大西さんと角南さんがメンバーでいらして、それ以来付き合いを続けています。万葉古代学研究所や神奈川大学の共同研究などを通じていろいろなことをさせていただきましたが、最も大きかったのは沖縄の海洋文化館のリニューアルに関する仕事です。その後もずっと縁が切れずに、現在では科学研究費・新学術領域の「出ユーラシアの統合的人類史学：文化創出・メカニズムの解明（文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）、2019～2023年度）」という大きなプロジェクトで一緒したり、あるいは考古天文学に関する別の科学研究費でも一緒したりしています。

話が戻りますが、そのような観点から、私は篠遠喜彦先生のエピソードを紹介しながら、後藤先生の研究をどう位置付けていくかお話ししたいと思います。篠遠先生のさまざまな業績については『楽園考古学』（篠遠 1994）などの書籍の中で詳しく述べられていますので、ここでは繰り返しません。今回ご紹介する篠遠先生の話は、世界遺産のタブタブアテアという遺跡に関するものに焦点を当てたいと思いま

す。

■篠遠先生のタブタブアテア遺跡修復

タブタブアテアは、フランス領ポリネシア、ソサエティ諸島のライアテア島にある祭祀遺跡です。2017年にUNESCOの世界遺産リストに記載されました。口頭伝承によると、ライアテア島はソサエティ諸島の中でも最大の宗教的中心地で、この島のオボア地区で、タンガロア神の息子であるオロ神が生まれたとされています。そのため、この地区にある神殿、ポリネシア語ではマラエと言いますが、「タブタブアテアのマラエ」が、オロ神の信仰の中心となって、16世紀ごろには、このオロ神を主神とする宗派がソサエティ諸島の全域に大きな影響力を及ぼしていたといわれています。

このタブタブアテアの研究や、さらにはその遺跡の修復に大きな役割を果たしたのが篠遠先生でした。近年、新たにこのタブタブアテアの遺跡の修復が行われたのですが、晩年になっていた篠遠先生は、この復元に関しては終始批判的な態度を示していました。世界遺産リストへの登録がなされたのは2017年ですが、登録のわずか3カ月後の2017年10月に篠遠先生はこの世を去ることになりました。先生がどのような思いでタブタブアテアの世界遺産登録のニュースを聞いたのかは分かりません。しかし、篠遠先生がタブタブアテアでどのような仕事をし、一体何を批判していたのかを振り返ることで、先生がこの文化遺産について果たした貢献を見てみたいと思います。

タブタブアテアは、かつてこの島々の重要な宗教的中心地であったにもかかわらず、ヨーロッパ人がやってきてこの地域が植民地化され、新しくキリスト教がもたらされたことにより、ポリネシア人が本来持っていた宗教が否定されてしまいました。しばらく人々の記憶から忘れ去られていたといわれています。それが1920年代に、篠遠先生の恩師であるビショップ博物館のケネス・エモリー博士がこの遺跡を再発見し、その後1967年から、タヒチの観光開発局の主導によってマラエの修復が始められました。そこにビショップ博物館が、1967年から1969年の3カ年にわたって協力することになり、モーレア島、ファヒネ島、ライアテア島、ボラボラ島という島々での修復プログラムに参画することになりました。このときのビショップ博物館のリーダーを務めたのが篠遠先生でした。1969年に修復プロジェクトが終わった後も、篠遠先生はファヒネ島を中心に自身のフィールドワー

クを続けられ、後藤先生の発表にもあったカヌーの発見などに至ります。それが30年以上にわたる篠遠先生のライフワークになったわけです。

■オーセンティシティを守る復元を

タブタブアテアの祭祀遺跡は、マラエ・タブタブアテアという神殿だけではなく、他にもマラエ・ハウヴィリと呼ばれる大型のマラエがあります。加えて、それよりも小規模なマラエや、それぞれ関連したような考古学的な遺構や遺跡が幾つか存在しています。そのうち篠遠先生は、マラエ・タブタブアテアとマラエ・ハウヴィリを加えた四つのマラエに関する修復に携わりました。修復に当たって篠遠先生が採用した方法は極めて注意深いもので、遺構の崩壊を食い止めて安定化した状態にすることに主眼を置きました。つまり、崩れてしまった石材を元の位置に戻し、それを補強するために最小限の処置を行うことにとどめて、推測によって復元を行うことは厳に戒めていました。

実はこうした修復の方針には背景があります。1964年、ヴェニス憲章という歴史的な記念物の修復方針を定めた国際憲章が採択されました。その中には、歴史的建造物を修復する場合には、建設当初の部材をなるべく使うこと、失われた部分を補足する場合は、推測ではなくて科学的に根拠のある復元とすること、新しい部材を使って復元した場合は、それが古い部材と明らかに違うことが分かるように修復することが大事であるといった、保存修復に関する基本的な理念があります。これは現在までも引き継がれている修復の理念です。

ヴェニス憲章が採択された翌年の1965年にUNESCOの諮問機関であるICOMOSという組織が設立されます。これは国際記念物遺跡会議（International Council on Monuments and Sites）と言い、そのアルファベットの頭文字を取ってICOMOSと言います。世界遺産のニュースの中でよく名前が出てくるので聞いたことがある人がいるとは思いますが、世界遺産を登録するに当たって、その遺跡の価値を評価するという重要な役割が与えられた組織です。さらには、既に登録された世界遺産も定期的に保存状態をモニタリングする必要があるのですが、そのときのミッションを派遣するのもICOMOSの役割です。このヴェニス憲章やICOMOSの設立と篠遠先生が遺跡の修復に携わっていたのはほぼ同じ時期に当たります。つまり、篠遠先生が行った修復は、国際的な水準に照らしても非常に高い水準を保ったものであると評価できます。

その後、タブタブアテアの修復は、フランス領ポリネシア政府の考古局によって1980年代から1990年代にかけて継続的に実施されました。1993年になって、当時のフランス領ポリネシアの大統領が、タブタブアテアの修復事業への協力を篠遠先生に要請します。それを受けて篠遠先生は、1995年1月に現地へ赴くべくタヒチの空港に降り立ちました。すると、その空港に3人の男が待ち構えていたのです。彼らは、ライアテア島から来た者だと名乗り、篠遠先生に、一刻も早くライアテア島に来てタブタブアテアのマラエの修復の様子を見てほしいと懇願しました。彼らによると、考古局が行っていた修復作業はめちゃくちゃなもので、そこにはマナが存在しないと言うのです。マナというのは、ポリネシア人が伝統的に信じている超自然的な力で、遺跡に宿る力なのですが、そういったものがもうないのだと彼らは言ったわけです。このときに篠遠先生は、ライアテア島での修復が既に考古局の手によって完了してしまっているということ、そのことについて自分は何も知らされていないことを初めて知りました。

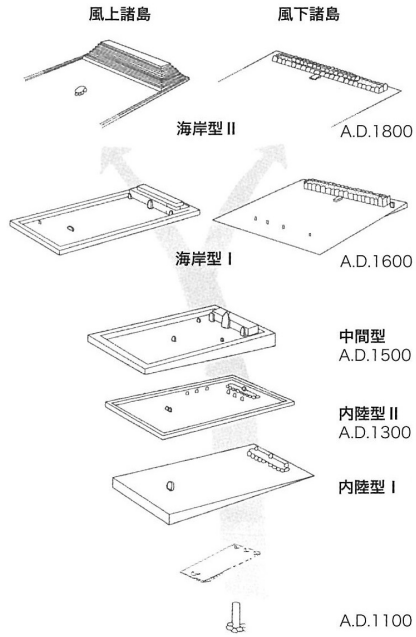
驚いた先生は現地に向かってその様子を見たわけですが、幸いなことに、マラエ・タブタブアテアの方はほぼ手付かずの状態に残されていたのですが、マラエ・ハウヴィリなど幾つかの遺跡に関しては既に修復が終わっていて、しかもそれが遺跡のオーセンティシティを損なうような不適切な手法でなされていたことを目にします。オーセンティシティというのは、日本語では遺跡の真正性と訳すのですが、それを確保するためには、ヴェニス憲章でうたったような、オリジナルのものを尊重し、推定による復元をしないということが重要になってきます。世界遺産に登録される際には、オーセンティシティを保っているかどうか大きな評価のポイントとなります。

中でも問題だったのが、マラエ・ハウヴィリの修復です。篠遠先生によると、このような形のマラエはソサエティ諸島の中では歴史上存在したことがないということです。この遺跡を見ると、「アフ」と呼ばれる石灰岩の板石で築かれた祭壇が海側にあり、その前面に広場が広がっていて、それを取り囲むように壁のようなものが巡らされています。その壁の一部には入り口のような部分が開いています。

マラエの形式の歴史的な変遷を示した図を見ると、板石を持つアフと呼ばれる祭壇が築かれるマラエは海岸部に特徴的な形式で、それには周壁が存在する例はないと考えられています。例えば風下諸島側の海岸型Ⅰのタイプでは、アフがあつて周壁がありません。一方、周壁を持つタイプもあることはあります。内陸型Ⅱには周

壁がありますが、板石による祭壇はありません。復元されたマラエ・ハウヴィリは、風下諸島側の海岸型Ⅰと内陸型Ⅱの特徴を組み合わせたような形になっています。しかも、内陸型Ⅱは周壁が巡らされているのですが、マラエ・ハウヴィリにあるような入り口のようなものはないのです。つまり復元されたマラエは、歴史的には存在しないことが明らかであると篠遠先生は主張されています。(図1、図2)

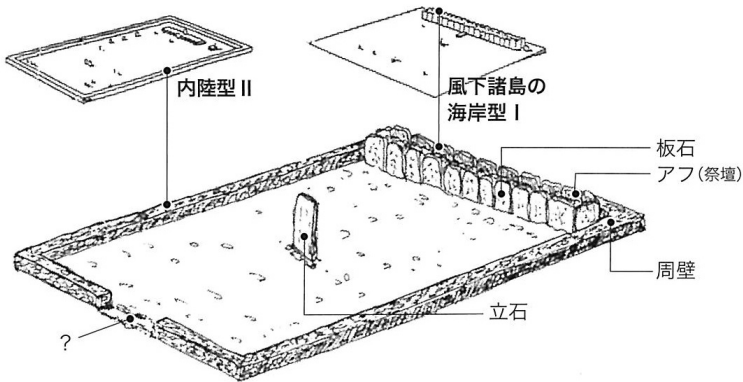
篠遠先生が実際にこの修復を行った考古局のスタッフに聞き取りを行ったところ、「発掘調査の結果、広場を取り囲むように壁の



マラエの形式の変遷図

出典: Sinoto 2001 Fig. 5

図1 マラエの形式の変遷図



復元されたマラエ・ハウヴィリの模式図

二つの異なるマラエの形式の要素が混ぜ合わされたものであることがわかる。出典: Sinoto 2001 Fig. 12a

図2 復元されたマラエ・ハウヴィリの模式図

図1・2 出典: 石村智2019「世界文化遺産と考古学」『季刊民族学』169: 76-83

基礎のような遺構が見つかった」ということでした。確かに、海岸部の形式のマラエが成立する過渡的な様相として、周壁の基礎のみが築かれるという例があり、そういった事例はフアヒネ島のマエヴァというところに存在するそうです。しかしその場合でも、基礎の部分だけが築かれ、壁自体が築かれることはないと言います。実際にマラエ・ハウヴィリに関しても篠遠先生は1960年代に修復を行っているのですが、修復に伴う調査でも、全く壁のようなものは存在しておらず、その痕跡すらなかったと言うのです。こういったこともあって篠遠先生は、マラエ・ハウヴィリの復元に関して、少なくとも周壁には科学的根拠がないので取り除くべきであると主張しました。しかしながらその意見は受け入れられることはなく、今もなお壁がある状態で復元されたものが存在しています。

復元とオーセンティシティの問題を考えるに当たり、ある遺産が世界遺産リストへの登録の申請がなされたときに、その遺産がオーセンティシティを保っているか否かが極めて厳密に評価されます。もし仮に科学的根拠に基づかない復元がなされていた場合は、登録が認められないのが一般的です。しかし、そういった評価を行うのはUNESCOの諮問機関であるICOMOSです。

では、ICOMOSはこのマラエ・ハウヴィリの復元をどのように評価したのでしょうか。ICOMOSが世界遺産委員会に提出した報告書によると、現地で修復を巡る議論があることを確かにICOMOS側が認識しています。そのため、2016年10月3日付でICOMOSはフランス政府に対し、修復に対する追加の情報を提出するよう要請しました。それを受けて、フランス政府は11月7日に追加情報のレポートをICOMOSに提出しました。

フランス政府によるレポートでは、このマラエが復元されたような形で過去に存在したか分からないことは認めており、アフが建てられた時点で周壁はなかったかもしれないということも認めています。また、復元したマラエの形の是非に関しては、住民に賛否を問うワークショップを数回にわたり開催したのですが、意見が割れたままであると報告しています。

これを受けてICOMOSは、マラエ・ハウヴィリの復元は性急で、あまりにも軽はずみであったと指摘し、他の復元案に関しても引き続き検討するようにフランス政府に勧告するレポートを書いています。しかしICOMOSは、この復元は遺跡のオーセンティシティを損なっておらず、世界遺産リストに登録する上で問題にならないという評価を最終的に下しました。ICOMOSの報告書は複数の匿名の評価者によっ

て作成されるので、なぜこのような結論に至ったかの詳細は分かりません。しかしながら、いったんタブタブアテアが世界遺産になってしまい、現在観光客が復元されたマラエの姿を見ることによって、この復元にある意味お墨付きが与えられてしまうことが危惧されます。

この修復だけではなく、篠遠先生はソサエティ諸島でさまざまな遺跡の修復に携わってきたのですが、近年になり、そういったものを否定する動きが出てきています。ファヒネ島には水の上に立っているミーティングハウスがありました。ハリケーンによって一度壊れてしまい、その後現地の政府が建て直したのですが、それはコンクリートで建てられた、オーセンティシティに配慮していない復元になっています。そういったむちゃくちゃな復元はあちこちで行われていて、それは篠遠先生がこれまでやってきた科学的根拠に基づいた復元を否定する形になってしまっています。

こういった背景には現地の政治的な問題があるということは篠遠先生自身も気が付いています。ただ、外国人研究者である篠遠先生が他国の文化遺産に向かうときに直面せざるを得ない難しさがここにあると思います。そもそもソサエティ諸島の遺跡は、先住民であるポリネシア人の祖先が残したものです。しかし現実には、この地は現在フランスの領土となっていて、タブタブアテアの世界遺産に関しても、フランスの文化遺産として世界遺産に登録されています。その意味で、非常に政治的にデリケートな問題をはらんでいることは明らかです。その上で、ビショップ博物館というアメリカ合衆国にある博物館の、篠遠喜彦先生という日本にルーツを持つ人が介入してくるということは、非常に難しい政治性をはらんでいることは明らかです。篠遠先生自身もこの問題に関して非常にセンシティブに感じていたことが、先生の書かれた幾つかの文章からも読み取れます。

しかし、そうしたことを全て分かった上で、篠遠先生はあえて「たとえ私がタヒチから追放されても、タヒチの将来のためには、これらのマラエはあなたたちの祖先が築いたものではないということを私は記録していく」と言うのです。政治的な問題に対しても、あくまで考古学の科学的証拠に基づいて反論を続けていくという、研究者としての非常に真摯な姿に、学者としての矜持を感じざるを得ないと思います。

2014年にライアテアを訪れた際、現地の人たちからキルトを送られている篠遠先生の写真(図3)があります。実質的にはこれが篠遠先生の最後のライアテア訪問

です。篠遠先生の業績やお人柄に対して、現地では大きな尊敬の念が持たれていることを示していると思います。

■後藤先生のパブリックアーケオロジの試み

最後に、後藤先生の話に戻りたいと思います。後藤先生のご講演の中でも、篠遠先生はパブリックアーケオロジを先駆けて行っていたと指摘されています。

後藤先生自身もパブリックアーケオロジ的な、人類学の研究成果を社会に還元することに関して非常に多くの力を注いでこられたと思います。その一つは沖縄の海洋文化館のリニューアルであり、十数年前にハワイのホクレア号が日本を訪れたときの事業に関わられたことでもあります。さらに現在は、科学研究費などによって日本全国にプラネタリウムの出張上映を行う、人類学プラネタリウムのプロジェクトもされています。私がご一緒したのは宮崎県の日向市と北海道の標津町、そして佐賀県の吉野ヶ里遺跡ですが、それぞれの地域に特徴的なプラネタリウムのコンテンツを作って見せる試みをされました。例えば北海道の標津町ではアイヌの星座を見せました。また吉野ヶ里遺跡では、弥生時代には南の空のちょうど雲仙・普賢岳の上に南十字星が見えたので、その様子をプラネタリウムで再現しました。このようにそれぞれの地域に合わせたプラネタリウムのコンテンツを開発していらっしゃいます。

こうしたことから後藤先生は、学問の研究と社会との関わり、社会への還元を常に意識されているのだらうと思います。そしてこれは、先生が四人の巨人の一人として尊敬している篠遠先生の足跡、後ろ姿を見ながら取り組まれてきたことではないかと感じています。大学のお仕事は退職されますが、人類学プラネタリウムの試みや日本航海協会で行っている古代の航海の復元の試みには引き続き携われるということですので、今後のご活躍を私も非常に楽しみにしておりますし、私自身もお手伝いできればと思っています。



図3

出典：石村智2019「世界文化遺産と考古学」

『季刊民族学』169：76-83

